

ロータリーの心の実践に

—21世紀のロータリー活動を考える—



—— シンポジスト

コーディネーター
わたなべ こう
渡辺 孝

1921年岐阜県生まれ。神戸大学経済学部卒業。現在、渡辺養蜂場場長。東洋蜂蜜(株)・日本蜂蜜(株)・日本王乳センター各社長。岐阜土地興業(株)会長、日本リネンサプライ(株)社長。岐阜県教育委員。岐阜県読書推進・読書サークル連絡協議会会長。岐阜市明るい選挙推進協議会会長。岐阜県青色申告会長。岐阜南ロータリークラブ創立会員(1957年より)、同会長。各務原ロータリークラブ特別代表。ポールハリスフェロー。国際ロータリー1986-87年度第2630地区パストガバナー。著作に「実践理性批判」「ハチミツの百科」「ミツバチと人間」「先師蜂友」「ハチミツ特効食」「ローヤルゼリーの科学」「ミツバチの文化史」「ミツバチの文学誌」。小説に「飛鳥の百済びと」「美濃路燃ゆ」ほか、父君渡辺寛氏と「近代養蜂」など多数。



—— シンポジスト

アフリカ友の会 代表
とくなが みずこ
徳永 瑞子

1948年生まれ。九州大学医学部付属助産婦学校卒業後、ベルギー・レオポルド王立記念熱帯医学校卒業。国立公衆衛生院専攻課程、専門課程、研究課程終了。アフリカ友の会代表。医学博士。1971年国立東京第二病院勤務を経て、ザイール共和国ムシソ診療所勤務。1976年よりザイール共和国で看護婦・助産婦として医療にあたる。1983年より7年間聖母病院勤務。元学習院短期大学、日本福祉教育専門学校講師。10年間の医療ボランティア活動から、中央アフリカ共和国に同国厚生省認可によるプエ・ラブ保健センターを拠点として、医療アフリカ友の会 AMIS D'AFRIGUE を主宰。貧困とエイズによる犠牲者を1人でも少なくすることを目的とする施設を運営。医療・訪問看護・給食サービス・食糧配給・生きがい教育・エイズ啓蒙活動を行っている。著作に「エチオピア日記」「プサ・マカシ」「ザンベ」。 「プサ・マカシ」で第11回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞受賞。連絡先：東京都北区赤羽台3-2-12-102アフリカ友の会。



—— シンポジスト

第2630地区財団学友会
会長
かわくち たかゆき
川口 豊

1950年生まれ。岐阜県出身。愛知県立芸術大学卒業。東京芸術大学大学院オペラ研究科終了。国際ロータリー財団奨学生として1977年から4年間ドイツ国立ケルン音楽大学に留学。同声楽科卒業。声楽を柴田睦、木下保、ペーター・ヴィッチ、レナータ・ペーターの各氏に師事。現在東海女子大学教授。ロータリー財団第2630地区学友会長。名古屋オペラ協会役員。日本バイオミュージック学会会員。日本骨髓移植財団東海地区普及広報委員。オペラ「魔笛」「フィガロの結婚」など多数のオペラに出演。翻訳書に「冬の旅」「ベートーベン第九交響曲・合唱の歌い方」「リリー・マーレーン：私の歌唱法」「カルーソとテトラツィーニ」など多し。犬山市の授産施設やスリランカなどへボランティアの演奏活動。名古屋市中村区在住。



—— シンポジスト

シゲタ海外産業開発
オフィス主宰
しげた たかやす
重田 隆康

1936年生まれ。東京都出身。東京都立大学工学部卒。シゲタ海外産業開発オフィス主宰。国際交通安全学会顧問。三重大学・国立鈴鹿高等専門学校講師。名古屋 JICA 研修センター講師。1961年、本田技研工業(株)入社。1979年より約6年間ホンダ・アフリカ事務所長。本田技研工業創業者の本田宗一郎氏の私財により、東南アジア諸国の将来有望な優れた公務員・団体・企業の中堅層や大学教官を招聘し、日本の近代化のプロセスや文化を学び、研究する民間国際教育機関である財団法人国際安全学会鈴鹿国際フォーラム (IATSS FORUM イアッツフォーラム) 創立に参加、1985年よりその国際フォーラム初代所長。同施設の修了者は500名以上に及び、東南アジア諸国に中核として活躍中。元国土庁東南アジア青年産業塾審議委員、元三重県国際交流財団理事。三重県鈴鹿市在住。

- ・コーディネーター
渡辺 孝 パストガバナー
- ・シンポジスト
徳永 瑞子 アフリカ友の会代表
川口 豊 財団学友会会長
重田 隆康 シゲタ海外産業開発オフィス主宰

渡辺：失礼いたします。私どもに与えられましたテーマは、「21世紀のロータリーを考える」という非常に大きなテーマでございます。それにシンポジストの先生方は、ご略歴が大会要覧の29ページ以下に出ておりますけれども、皆様方に向かって左から、徳永先生。この方はお医者さんでございます、医学博士の肩書きも持っていますけれども、実際におやりになっておりますことは、アフリカでお産婆さんなんです。それからその次の川口豊先生。これは皆さん方たぶんおなじみだと思いますけれども、財団奨学生のOBの会で学友会というのがございまして、その会長さんとして、音楽家でございます。国際的に非常にご活躍の音楽家。それから一番右の重田先生。この方は、本田技研のもとと技術屋さんでございます、創立者の本田宗一郎氏に非常にご信任のあついで、本田技研の海外の交流機関の長をなさっておる。この方も非常に幅の広い国際的な活躍をなさっておるわけでございますが、そういう具合にお三方のご経歴をお比べになりますとわかりますように、それぞれ非常に多彩なご経歴でございますけれども、共通項らしいものはほとんどない。まあ強いて言うならば、これは国際性ということになりますでしょうが。



そこで21世紀のロータリーというテーマとこれを

どう結びつけるか。そこで問題を限定するために、あまり大きな問題すぎますので、まず21世紀というのはいったいどういう時代だろうか。そして、その21世紀の一番の大きな問題はいったいどういう問題だろうか。その問題に対してロータリーはどのような貢献ができるか。そういうような角度から切り込んでまいりたいと思います。そこで21世紀のロータリー、いや、ロータリーではなくて、そもそも21世紀というのはどういう時代かということでございまして、もうあと4年経てば21世紀になる。なるわけではありますけれども、お互いにどうもこの姿がはっきり見えてこない。しかし、その21世紀が突然現われるわけではもちろんないわけでありまして、この20世紀の中から当然現われるわけですから、もうすでにその21世紀の萌芽がいたるところにあると思います。20世紀ってというのは、どういう時代だったか。これはいろんな見方があると思いますが、一般に言われておりますように「戦争と革命の時代」であったというふうに私は一応定義したいと思えます。20世紀の初頭からボーア戦争というアフリカを舞台にした大戦争がありましたし、それから1905年、これはロータリーがシカゴに誕生した年でございますけれども、これは実は明治38年でありまして、明治37年から続いております日露戦争が終わった年です。これは日本とロシアというような、いわば白人と黄色人種、有色人種との本格的な大戦争だった。それから第一次世界大戦、引き続いて第二次世界大戦。ほとんど人類が破滅に瀕するような大きな戦争が相次いで起こった。それから、その附随の産物といたしましてロシア革命とか中国革命が起こったことは、ご案内のとおりでございます。そういうような戦争と革命の世紀ではありましたけれども、21世紀はどうなんだろうか。私はこれはおそらくシンポジストの先生方からも反論が出るんじゃないかと思えますけれども、私は希望的観測も含めて申しますと、もう戦争はおそらくおこらないだろう。少なくとも第一次大戦とか第二次大戦のような人類の存亡をかけたようなああいいう大戦争は、これはもうおこ

らないだろう。というよりも、おこすことは不可能だろう。核兵器というものがありますから、そういうような大戦争をおこしたら、あきらかに人類は破滅でございます。もちろん局地戦はあるかと思えます。現在のボスニア・ヘルツ・ゴビナとか、あるいは徳永先生のアフリカが舞台となっておりますような、ああいいう部族間の戦争、そういう局地的なこぜり合いと言いますか、これはもう人間というものの持って生まれた業のようなものでございまして、やっぱり21世紀もおこるだろうけれども、しかし本格的な破滅的な大戦争はおこらないだろう、これが一つ。もう一つ。それじゃ革命はどうか。革命も私は、これもあんまり楽観的すぎるかもわかりませんが、ロシア革命とか中国革命のような何千万人も殺すというような、ああいいう革命はおこらないだろう。と申しますのは、ここまで議会制民主主義が各国に普及してまいりますと、そんな流血の惨事に訴えてまで政権を倒す必要がない。選挙という合法的な手段がありますから、これでもって好ましくない政権を倒すことができる。まあそういうふうに考えますと、革命というものもそう大規模な革命はおこらないだろう。

結論的には、だから21世紀というのは戦争も革命もない時代だろうというふうに、私は冒頭にまず申し上げたいと思えます。そうすると、21世紀というのは戦争も革命もない非常に平和な、まさにバラ色の世界だということになりそうでございますけれども、これはおそらくそうはいかないだろう。と申しますのは、人口問題と食糧問題、人口と食糧とのこのギャップの問題。これが非常に深刻でございます、ご案内のように現在地球上には58億の人間が住んでおります。これが非常に急テンポで増えつつある。今まで人口増加を阻んできたファクターは、これは戦



争であり、伝染病の蔓延であり、あるいは革命でございます。医学の発達によりまして、伝染病も防ぐことができる。そして戦争も革命もないとしますと、これはもう人口増加にブレーキをかけるものなくなるわけですから、さらに爆発的な勢いで人口が増えるのではないかと。それじゃあ、その食糧はどうだろうか。この食糧ってものは、200年前に、イギリスのマルサスが予言しましたように、人口増加は等比級数的である。1が2になり、2が4になり、4が8になる。そういう倍々というふうには増えるけれども、食糧の増産というのは等差級数的、1が2になり、2が3になり、3が4になるというような非常にスローテンポだ。当然両者の間には非常に大きなギャップができる。だからマルサスの結論は、我々は道徳的禁欲、モーラル・アブスティネンスという言葉を使っておりますけれども、こういう禁欲によって将来におこるであろう飢餓を予防する他ないんだというのが結論だったと思えますが、まさにマルサスの言うとおりでございまして、とにかく何らかの手段でもってこの人口増加をくいとめることが必要な時代が21世紀ではないか。しかも、この人口が爆発的に増加しておりますのが、ご案内のように発展途上国であります。こういう地帯は、経済の成長率よりも人口の増加率の方が上回っておる。ですから一人あたりの国民所得に換算しますと、それがどんどんどんどん減っていく。つまり、ますます貧困化しつつあるわけです。これは、先ほど講演でRI会長代理がおっしゃったように、キンロス会長が非常に憂慮していらっしゃる飢餓とか貧困とか、あるいは識字率、そういう問題に密接に関係しておるわけでございますけれども、そういうような問題が21世紀の一番中心的な問題なのではないだろうか。それじゃあ、いったい人口の増加をなんとか人間が理性的にくいとめることができるかどうか。これは、私はできるだろうと楽観しておりましたんですが、10年ばかり前でしたか、カイロで世界の代表的な人口学者たちが会談を開いて、いわゆるカイロ会議を開催した。そしてもう結局結論はわかってますから、産

争で、

児制限、パス・コントロール以外にない。それに対してイエスカノーか。私はイエスということになるだろうと思っておりましたんですが、これが逆なんです。仏教徒とそれからプロテスタント（新教徒）、これはイエス。ところが絶対反対なのがカトリック（旧教徒）とイスラムです。これは神の御心に反するということでノーということになった。世界の中で人口が半分以上あるのが、今のイスラムとそれからカトリック、この両国ですから、何ともしようがない。ということで、この人口の増加をくいとめる、そういう歯止めがもうなくなったわけです。これをどう考えるかということ、これがまず第一に大きな問題だと思います。



時間が余りございませんので、もう一つの問題。これはもう今朝ほどからいろんな方がおとりあげになっていらっしゃいます「環境保全」、あるいは「自然破壊」

の問題。人類は決して昔から自然を破壊してきたわけではございません。昔は、かつては、とにかく大自然の中で自然と融和しながら、調和しながら生きてきた。それが急に自然の破壊者になりましたのは、18世紀の産業革命以後です。特にこの20世紀に入ってから急テンポで自然破壊が進んで来た。毎日、新聞ダネになるような事件が次々におこっておりますけれども、これがこのままでは21世紀というのは、本当に人類の危機になるであろうということは誰でも憂慮しているところでございます。

時間がございませんので詳しくは申しませんが、今申しあげました「人口と食糧とのギャップ」、それからもう一つが「自然破壊の問題」、この二つにつきまして、本日のこの三先生からいろいろご所見うけたまわりたいわけでございます。お手元の大会要覧29ページ以下に先生方のご略歴が書いてあります。最初に徳永先生からご意見をうけたまわりま

すが、徳永先生は、ここに書いてありますように1948年のお生まれですからまだ若いわけですが、この方は常時アフリカにお住まいでございまして、今日は特にこのシンポジウムに出席するためにアフリカから日本へお帰りいただいた、非常に貴重な方でございます。この方はご本人のお口からうけたまわりますと、お若いころから、もちろん今でもお若いのですが、若いころから非常にアフリカに憧れてですね、アフリカ人になることを夢みたくらいな方だそうです。そしてアフリカにずっと定住なさいますと、さっきもご紹介したようにお産婆さんをおやりになって、普通ならとても助からない子どもをどんどん助けて、そしてお産をさせた。現地で本当の神様扱いだそうですね。日本のシュバイツァーと言われておるんだそうでございますけれども、そういう方でございます（拍手）。アフリカにおけるご生活が非常に長いでございますが、つい最近、この10年ぐらいは中央アフリカにお住まいでございまして、中央アフリカ政府から認可をされまして「アフリカ友の会」という団体を結成された。もちろんこれはボランティアです。政府のお墨付きですからNGOと言えるのかどうかわかりませんが、とにかくそういう非常に貴重な存在でありまして、私はこんな偉い方が日本人の中にいらっしゃったかと思って非常に感動したんでございます。今日おこしいただきましたお召し物、これは実はアフリカの民族衣装だそうです。ちょっとどうぞご起立を。（拍手）そういう方でございます。それじゃあ徳永先生ご発言を。ご発言の時間は、実は手持ち時間が4人で25分ずつでございまして、ちょうど100分。最初にひとり10分ずつお話をいただきまして、あと15分。これがまあきちんと15分といくか、お話の具合では多少移動するかもわかりませんが、そんなような目途でまいりたいと思います。それじゃあよろしく。徳永：はい、こんにちは。徳永でございます。（拍手）先ほど渡辺先生から過分に紹介していただきまして、なんか縮こまってしまいました。渡辺先生が人口問題、それに自然破壊の問題を提唱されましたが、



私はずっとアフリカに住んでおりまして、日本人というよりもむしろアフリカの立場からっていうことで今日発言させていただけたらなと思ってまいりました。人口問題っていうのは非常にとりざたされておりました。人口問題を語る時には、やっぱり私たちが何が怖いかと言うと、南の国々で人口が爆発して、私たちが食べれなくなるんじゃないかというのがやっぱり一番怖いですよ。食糧、地球資源っていうのは有限なものですから、その有限な地球資源っていうものをどのように配分していくか。それがアフリカから見ておりますと、世界人口58億の人たちがはたして平等に地球資源が分配されてるかどうかということに、いつも疑問を持つわけなんです。日本人一人が消費しているエネルギー、食べ物すべてで、開発途上国の人たちを80名養うことができるんだそうです。だから1対80なんです。だからそれを見ましても、いかに分配が充分におこなわれてないかっていうことなんです。それで、58億の中で常時飢餓線上にいらっしゃる方っていうのが、世界中に9億の方がいらっしゃるわけですね。私たち日本人が毎食食べてるので、一日一人あたり100カロリーずつ残飯が出てるんだそうです。だから私たち一人に対して300カロリーの残飯が毎日出てるわけですね。その300カロリーの残飯を全部集めていきますと、なんとエチオピアの2000人の方たちを養えるんだそうです。その残った残飯で。残飯のエネルギーですよ。それで養えるんだそうです。ちなみにエチオピアの人たちが非常に世界的にはカロリーを低くして生きていらっしゃるんですけども、その方たちが1500カロリーから1600カロリーで生きていらっしゃるわけですね。我々日本人が2900カロリー、アメリカ人が3000カロリーって、まあ一応平均で言われているんですけども。私は

現在アフリカで、中央アフリカ共和国でエイズの方たちの仕事をしているんですね。その時に、私たち日本人にとってエイズっていうのは非常に怖い病気なんですけれども、中央アフリカの人たちはいつも「飢えはエイズよりも怖い」っていうことをおっしゃるんですね。だから、私たちが今日も食べなかった、明日も食べなかった、一週間食べなかったら、私たちは死んでしまうんですね。でもエイズはHIVに感染しましても、10年で発病してから5年、15年の余裕があるわけなんです。だから女性で子どもをかかえて食べる物が無い人たちは、もうエイズのことなんか、そういうことよりも今日の食糧を得るために売春に走っていくわけなんです。だから私たちが一生懸命、中央アフリカ共和国でエイズの啓蒙活動やっているんですけども、なかなかこれは進まないんですね。それはやっぱり根底に飢えという問題、貧困っていう問題があるものなんです。だからやっぱり飢えはエイズよりも怖い。飢えっていうのは、やっぱり何よりも怖いってことだと思うんです。私たちはもう、私自身も戦後の人間ですから実際に飢えたこともありませんし、実感として我々日本人っていうのはほとんど実感、飢えの実感っていうのがないんですよ。だから私は人口問題を考える時に、はたして1対80の地球有限のエネルギーを不平等に分配している時に、開発途上国の人たちが実際に受胎調節をしてやめなくちゃいけないのか。それよりも80倍のエネルギーを消費している先進国の人たちが受胎調整をすべきか。それは私は非常に疑問を持つんです。たとえば、私のおります国は熱帯雨林がありまして、常時原生林を切り出しているんですよ。アフリカの人たちはアニミズムですから、木の中にも霊が宿っているということで、アフリカの人たちはわざわざ木を切ることは絶対しません。だから、スコールとかでそういう木が倒れたのを自分たちが薪として使う。でも先進国の方たちは、じゃんじゃんその原生林を切り出して自然を破壊していらっしゃる。そして、そういうものがパルプなり、いろんな物になるわけですね。アフ

リカの子供たちは小学校へ行く時に、この紙の大きさぐらいの黒板を皆持ってんです。だから字が書けるようになるまでは、紙っていうのは非常に高級品でもったいないですから、黒板に字を書いて習うんですよ。先進国の我々はコピーをやるわ、何をやるわって、すごい消費ですよ。それで実際に日本ではそのバージンパルプの方が非常に安いですから、なかなかリサイクルも進まない。そして、その山と積った紙を、それを火で燃やしてるわけですよ。片一方では、先進諸国では燃やしてる、片一方ではじゃんじゃん自然が破壊されて、アフリカの人たちは紙一枚も非常に大切に。これは学校に行っても、紙には字を書けない状態にあるんですよ。だからそういうふうに、非常に、この私たちがまず人口問題で第一回目にブカレストで人口会議が行なわれて、今度二回目にカイロで人口会議が行なわれたけれども、その時はやっぱり南の人口を抑えよってということが主流になってくるわけです。でもそれも一理あるかもしれませんが、やっぱり私たちは、私たち北の人間の飽食とやっぱり南の人たちの飢え、そういうこともやっぱり考えて、私たち自身の日常生活の中における消費は美徳、大量消費っていうのをやっぱり見直した上で、この人口問題っていうものを私たちはやっぱり語っていかなくちゃいけないんじゃないかなと思うんですね。

この場でトイレットペーパーのお話で恐縮なんですが、世界58億人いる中で皆さんはどれだけの人口の方たちがトイレットペーパーを使ってると思えますか。世界全部の人たちがトイレットペーパーを使ったら、これは世界の森林はもうすでないと思うんです。私がエチオピアにおりました時に、エチオピアの早稲^{かんぼ}の人たちをやりました時に、非常に驚いたのは、エチオピアではトイレットペーパーのかわりに丸い石を使うんですよ。石を使ってお手洗いがすんだ後に処理をする。私がおります中央アフリカでは、まだ草木がいっぱいありますから、トイレットペーパーは草木で作るんです。草木でやっちゃうんですよ。ベトナムのメコンデルタ

に行きましたら、ベトナムではトイレットペーパーっていうのは、バナナの葉っぱを乾かしたのを使ってるんです。だから、そういうふうによっぱりこの自然破壊の問題とか、人口問題っていうのは、やっぱりもう少し我々先進国の人たちが南の立場になって考えてほしいっていうことと、もう一つは南の人たちが発言権がないっていうのが、私は非常に残念だと思えます。いろんな会議にしましても、なかなか発言権がない。それはそれだけのまだ教育を受けてない人たちも多いですし、それが一つの声となつて上つてこないっていうところにあると思えますので、是非その地球を守るために皆さんも、この南北の格差っていうことを少し考えていただけたらと思います。一応提言として、一応これで次の…。

渡辺：ありがとうございます。(拍手) 人口問題、人口問題とって南にばかりに責任を押しつけるけれども、実際は北の方の責任ではないか。先進国の方が南を犠牲にしてやってきたことではないか。特に自然破壊なんかそうだとするような、非常に手厳しいご意見でございます。まったく長年の間アフリカにお住まいの先生ならではのご発言だと思います。

それでは、お次は川口豊先生でございますが、お手元の大会要覧の30ページにこの先生のプロフィールが出ておりますが、ロータリーの財団奨学生として1977年からドイツのケルン大学にご留学になりました。こちらのご卒業は愛知県立芸術大学でございます。そして、向こうで声楽を中心にご勉強になりました。実は今日このシンポジウムの途中息抜きに先生にドイツリードでも歌っていただけませんか、お願いしたんですが、先生深刻に考え込まれて、ちょっとどうもこれは雰囲気合わないから今夜のR I 会長代理歓迎晩餐会の席上でやりましょうというような(拍手) お言葉でございます。そして曲目も「菩提樹」はちょっと伴奏が難しいから「セレナーデ」ですね。「シュテンチュン」、それと「アンディームジーク」(「楽に寄す」)でしたかの二つをやるよというようなふうに約束していただ

きましたので、是非ご期待をいただきたいと思えます。じゃあ先生、どうぞお願いいたします。(拍手)



川口：ただ今ご紹介いただきました川口でございます。私、この紹介に書いていただいた中にあるように、ロータリーの奨学生として留学させて

いただいたのが1977年です。ちょうど今から20年前にドイツの音楽大学に入学させていただいて、右も左もわからないところで勉強させていただいたところです。20周年を記念しまして、この席に出させていただいたというわけですが、実は最初お話をうかがった時には「ロータリーの心の実践に」ということでしたので、ロータリーの皆さんの浄財で育てていただいた者として、何か私からお話させていただけることがあるというふうに思っておりましたんですけども、今のお話で、さて音楽を勉強してきた者が、今の現在の世界の人口問題についてどんな提言ができるだろうとなると、かなり難しいことかなというふうに、かなり難しいことよりほとんど不可能に近いかなと思えますけれども、私がロータリーの奨学生として経験させていただいたことをとおして、何かのヒントになるんじゃないかなと思って少しお話させていただきます。

私が留学させていただいたのが1977年ですから、もちろん東西分裂非常に厳しい時です。そんな時に私がドイツの学生たちと食堂でよく話をしておりました。東西がこんなに厳しく分れていて、そして東西ドイツってのはたして統一できるのかというようなことも始終向こうの学生たちと直接話をしておりました。そんな中でドイツの学生たちは、「いやいや統一なんていうのは不可能だ。」「まあ統一ができるとしても何十年後、あるいは100年後かもしれない。」なんかそんな話をしていたことを今も本当に鮮明に覚えています。私も東ドイツに何回か足を踏み入れ

たことがあります。踏み入れる、その国境を超えるのにもたいへんな手続きがいりますし、一歩向こうへ行ってみると、その経済力の格差、ものの考えの違い、もうたいへんものすごく大きいですよ。こんなのを統一しようと思ったら、たいへんなことだっていることは私も肌で感じました。私の友だちに「今度行くけれども、何をおみやげに持っていくか。」と言ったら「おまえの古のジープンでいいからおれに持ってきてくれ。彼女がいるから、彼女に西側の石けんを持ってきてくれ。」なんかそんなことをせつせつと私に言ってくれたことがあります。そんなことで、私も統一なんていうのは本当に難しいことだっているように思っておりました。それが、本当に見事なまでの統一劇だったと思います。私は時期尚早であったということは思っておりますけれども、それでもドイツは統一をはたした。そして、このことによってドイツは第二次世界大戦で世界に対して犯した大きな責任の最後の締めくくりをするんだという、なんかすごい意気込みを感じて感動しました。

皆さまの中にもご存知の方がいらっしゃるかもしれませんが、岐阜県的美濃加茂市にサノ・エンネ先生というドイツの方がいらっしゃいました。もうすでにお亡くなりになったんですけども。その東西ドイツの壁がなくなるというあの朝、私のとこへ電話をしてくまして、もう興奮状態。日本語の訳にしますと「春への信仰」原語で「フルーリング・クラウベ」と言うドイツの詩がありまして、これは自由が自分の回りにみなぎってくるんだということを書いた詩なんですけども、そのエンネ先生がその詩をずっと思い出しながら、私に延々とドイツ語で電話をしてくれました。なんてドイツ人たちが、これほどまでに待ち望んでいた統一なのかということをしごく感じて、私自身もあの時は本当に一緒にまるで自分のことのように感激したことを覚えてます。未だに旧西ドイツ側というのは、たいへんな負担をかかえていると思います。それは仕方がないですよ。その日まで、日本が第二次世界大

戦後にぐっと切りかわって、あれはすばらしい切りかわり方だと思いますけども、共産主義の教育方法しかなかった時代に、さあ壁がとれたからって、新しい教育のスタートがその次の日からできるわけではない。まず人間の教育者の育成の問題であるとか、いろんな問題をクリアしなければいけないと思います。人の、学者の予測によれば、本当に東西ドイツが均等になるには数十年かかるんじゃないかという予測をしている人もいらっしゃいます。おまけに最近の大きな問題になっているのは、まわりの旧共産圏の国から貧しい人たちがどんどん流入してきていますよね。それが一層ドイツの負担を大きくしているやに聞いております。そんな大きな負担を一方でかかえながら、今現在ドイツは通貨統合のリーダーシップをはたしています。私はなんてドイツという国、崇高な目標に向かってあらゆる犠牲をはらってまでもやっているんだなということを最近本当に痛感して、すばらしい国だと思っています。これは、私がドイツで勉強させていただいたことをきっかけに、こういうことをよく考えるようになったわけですけども、ドイツのすばらしさというのをすごく思っておりますし、コール首相ひきいるドイツの国民全部が一つになって新しい時代を築こうとしておりますよね。すばらしいことだなと思います。私自身、ドイツで勉強してきたことから現在こういうふうに思っております。このことから、私はロータリーの奉仕の精神で自分自身を育てていただいたというふうに思っています。私がこういうものの考え方ができるようになったということから、今度何か私自身はこのままではいけない、何か今度私が人のためにたつ番ではないかなということをすごく思います。それで、この紹介していただいた中にもちょっと書かせていただいたんですけども、実はまだそんなに、今の徳永先生ほど崇高な活動といえますかね、とてもまいりませんが、スリランカという国で音楽を通じて、向こうの人たちと協力して、向こうの病院の建設、あるいは施設の建設、そんなようなことにほんのささやかな気持ちが提供でき

ばというようなことでさせていただいております。でも私が向こうへ行っていることは、歌を歌うことなんですよね。でも先ほど徳永先生が言われたように、貧しい国ってというのはその日の食べる物がないうんです。そこへ行って私が大きな声で日本の歌を「めだかの学校は川の中」って言って歌ってあげて、はたして向こうの国の人、本当に喜んでくれるんだろうかということをお考えですとたいへん悲しくなります。私自身は徳永先生のように医療の技術があったらなあ、もっと自分ができるだろうな、あるいはこれから話される重田先生のように特殊な技術をお持ちだったら、もっとそういう貧しい国の人たちに貢献できるだろうなということを思いました。それで、今もこうして前に立たせていただいても何か人のために役に立つことってことを考えた時に、自分の心の中に本当に満たされないものを感じておりまして、ロータリーの皆さんのこういった精神にこれからも学ばさせていただき、育てていただかなければいけないとたくさんあるなというふうに思います。そんな時に、ある時この紹介文の中の下の方に、たまたまですけどもね、日本骨髓移植財団というようなことで関係持ったことがあります。このきっかけは、骨髓のドナー登録だったんですけども。ドナー登録した時に、自分の体の一部を提供してでもどこかの誰かわからない人を救える登録をしたんだなと思った時に、その一部分がね、私救われた気持ちになりました。そんなことを話しているうちに、それじゃあ、もっとドナーを増やすことに協力してくれないかということで骨髓財団から頼まれて、私なりにこれで一つはできるようになったなということでホッとしたことを覚えております。人口問題とかいうようなことを考えますと、今の私の話っているのはかけ離れておりますけれども、これまで私が経験したことから何かこの先ロータリーの将来ということで、この話の後半の方で結論につながればと思っております。どうもありがとうございました。(拍手)

渡辺：ありがとうございます。たいへん感動的な

お話で、本当にじんと胸を打たれました。最後に重田先生でございますが、お手元の大会要覧の31ページにプロフィールが紹介されておりますが、シゲタ海外産業開発オフィスの所長さんです。先ほど申しましたように、大学をお出になってすぐ本田技研へお入りになって、ねっからの技術者でいらっしゃいますけれども。本田技研が作り出した「財団法人国際安全学会鈴鹿国際フォーラム」略してイアツ・フォーラムと言うんだそうですが、これの創立に非常にご努力になりました、その所長をお努めになって、そして特に東西アジア諸国から留学に来ている人たちに対して非常にご尽力になっている方でございます。きわめて幅の広い教養人と申しますか、本当に端^{はなは}端^{はなは}をゆるさざる博覧強記ぶりでございます。お話をうけたまっておりますと1時間でも2時間でも時の経つのを忘れるくらいの方でございます。じゃあ先生、お願いいたします。(拍手)



重田：本日皆様の前でお話するチャンスが私に生まれたというのは、どうも察するに、このお二人のたいへんりっぱな先生がたがいらして一人ぐらい地元からも出さないバランスがとれないんじゃないかというご配慮で、言うならばお二人のご業績にからめますと、私は兵隊の位で言うと将軍と二等兵ぐらいの違いが。そんなことで、私の話そのものもたいへん次元の低いものにとってもあるんじゃないかと思っております。お許しくださいませ。

今ご紹介いただきましたように、鈴鹿国際フォーラムというところで約11年、東南アジアの人たちの教育機関の所長をやっておりました。ところがですね、実は今日の会のために2回ばかり徳永先生、それから川口先生とお話をしました。あけすけに言いますと、私は徳永先生の魅力にすっかりとらえられてしまったと。美味しいということもさることなが

ら、アフリカでご活躍しているそのご努力のすばらしさ、これにたいへん感動してしまっちゃったわけです。私の話しました東南アジアの話じゃなくて、今回はアフリカの話しようというふうに突然変えました。しかし渡辺先生には申し訳ないんですけれども。と申しますのも、私も川口先生がちょうどドイツに行っていたころの1976年から85年ぐらいまでアフリカで仕事やってたんです。どのように違うか、徳永先生とどのように違うかと言いますと、いわゆる技術者としてですね、アフリカ約50数ヶ国あると思いますけれども、そのうち40ヶ国ぐらい、主にブラックアフリカですね、西アフリカと言われるブラックアフリカを上の方から言うとセネガルだとか、その上のモリタニア、リベリア、シエラレオネ、アイボリコースト、トーゴ、ガーナ、ベニン、ナイジェリア、まあナイジェリア、カメルーン、ガボン、それから先生のいらしたザイール、あのへんを6年間にわたりましてぐるぐる仕事しながら回っておったわけです。ところが、私が、私の上司がですね、アフリカへ行って仕事をやるのは、やはり女房、子ども連れて行ってやった方がいいねと。それは、アフリカにどうも家族を置くのは危険であると、あなたの仕事っていうのは、アフリカ中を転々として歩くんだからということで、実はロンドンに事務所を置きましてロンドンにいながら6年間アフリカで仕事やってたわけです。ということは、いうならばイギリスという、英国という非常に文化豊かなエレガントなですね、インテレクチュアルな国に住みながら、率直に申し上げまして世界でも一番最低の国を回っておる。この二つを、二つ並べながら1ヶ月はイギリスの文明を見る、1ヶ月はアフリカの生活を見る、また…というような生活を約6年間やりました。そんな意味で、徳永先生とは別のアプローチですね、アフリカを見たということで、アフリカについてお話を、むしろ徳永先生のお話を別な意味からつめてみたいと思っております。

と、もう一つありましてですね、私、その後ロータリークラブで卓話をさせていただくチャンスが非

常にありましたけども、一番最初に卓話をしたのがなんとアフリカだったんです。あれからナイジェリアのラゴス、当時ラゴスが首都だったんですけども、そこでロータリークラブの方にホテルのバーでばったり会いまして、お医者でした。色のまっ黒な人です。ロータリークラブで卓話をやってくれと、日本から来たっていうことで日本について話してくれと。30人ぐらいの方がホテルの方に集まりまして、そこで英語で卓話をやったんです。まあそんなことで、ロータリークラブの親しみというのは今でも持っています。その中で「ところで最近香港っていう国からたくさん製品が来るけど、香港っていうのは日本のどのへんにあるんだよ」というような質問がありましてですね、非常に印象に残っております。私があるアフリカへ行った時は、アメリカのハリウッド映画で見たような緑とですね、それからロマンスと冒険といっぱい詰ったアフリカを念頭にして、すばらしい生活が展開するんじゃないかと思って行ったんです。ところが、アフリカですからライオンがいるだろう、キリンがいるだろう、シマウマがいるだろうと思って行きました。確かにいました。いましたけども、ゾウがいたり、ライオンがいたりというアフリカはですね、東アフリカのケニアがあってタンザニアがあって、それから先生が働いていらっしゃる中央アフリカ、南側なんですね。高原地帯なんです。ところが私が行った西アフリカには、驚いたところに動物園を除いては全然野生動物がいなかったんです。野生動物どころか、犬も猫もいないですね。食べちゃったんです。みんな。それほど西アフリカの黒人諸国っていうのは非常に貧しい生活をしていると。それだけじゃなくて私が驚いたのは、もちろんいわゆるサーヘルって言ってモリタリヤへ行きましたら、木がみんな立ち枯れしていると。話を聞いたら、たかだか数年前まではみんな緑だったんだと、ところが砂漠化がどんどん進んじやって、しかも放牧ですね。緑をみんな食っちゃって、1年間に2キロとか3キロのスピードで砂漠化が進んでいるという悲惨なアフリカを見たわけです。悲惨

という別な意味でまたたいへんな悲惨があったんですけれども、その悲惨というのは、いわゆる文明社会、日本を含めて文明社会がアフリカというですね、非常に自然に恵まれた国を実は破壊しているんじゃないだろうか。たとえば、その黒人国の首都へ行きますとですね、いたるところにゴミがちらかっているわけです。それから自動車が真っ赤になって焼けただけたやつが50メートルおきぐらいに置きっぱなしになってるんですね。これをよく見ると、そのゴミがですね、日本から行った工業製品のラジカセの発泡スチロールであったり、ダンボールであったり、あるいは自動車の部品のプラスチックのカバーであったりなんです。それを野放しにブタだとかヤギが食ってですね、死んじやって、その死体がもう累々としているわけですね。アフリカの人たちはそれに火をつけまして燃すもんですから、車で走ってくるのに火事場の中を車で走っていると。

私はいちサラリーマン、しかもあまり能力のないサラリーマンとして、いわゆる善良なサラリーマンとして一生懸命社会に豊かさをもたらそう、それから快適さをもたらそうということではがんばってきたわけです。ところが、自分がいいと思っている、美德だと思ってたことが実は別な世界へ行ったら、それがその国を破壊しているんじゃないだろうか。その国のエコロジーっていうか、エコシステムっていいですか、一つのリサイクルがダメにしちゃってるんじゃないだろうかということで、きわめて平凡なサラリーマンだったんですけども、自分のやっていること、文明国人の一人の技術者としてやることが、必ずしももう一つの上位の概念から見た場合、正しくないんじゃないだろうかというように思い始めました。要するに、私が見方が単眼から複眼になりまして、右と左の目で見ることによってものごとが更



に立体的に見えてきて、自分のやってることの良さと悪いことっていうものが何かはっきりしてきたというような経験をアフリカでいたしました。それは一つアフリカっていうものを例にとってお話したんですけども、どうもそれだけじゃなくて、アフリカっていうのは一つの象徴的なサンプルだけであって、地球全体っていう点からいったら我々が工業社会の中でただひたすらやってきたこと、これが善なんである、美德なんであると。やってきたことが、実は21世紀に向かっての社会っていうものにとってはネガティブな影響を与えているというような非常にヘソ曲がりなですね、見方っていうものが生まれてきたと思います。去年退職いたしまして、新聞だとかテレビだとか外国のものも含めましていろいろ見るチャンスが出てきて、やっぱり今のままではいけないね。さっき北川さんがおっしゃったように、どこかで生き方を、考え方を、行動パターンをかえなくちゃいけない時が来てるんじゃないだろうかというように、60になって考え始めたわけなんです。ここで終わりますけども、時間の関係で後半では、またそれがどのように私の考え方が展開していくかお話ししたいと存じます。(拍手)

渡辺：ありがとうございます。いうなればアフリカの歴史は、先進国の罪悪の歴史であるというような非常にショッキングなご発言でした。最後にはアフリカが先進国のゴミタメになっているような印象を受けましたが、これで三先生方一巡いたしました。あとは後半で最初のご発言を補足的にお話いただくか、あるいは更に一層新しくディスカッションを深めていただくか、どちらでも結構でございますが。それから他の先生方からご発言あったことに対して自分はそうじゃない、こう思うんだというようなご発言でも結構です。三先生方のディスカッションの歯車がかみ合った方が、おもしろいと思いますので。これは別に特定の結論を出すというシンポジウムではございません。シンポジウムといえば、とかくとってくっつけたようなきれいごとで終わるような場合が多いんですが、今回はそんなことを期待してお

りませんから。言い放題の放言で結構でございますので、是非一つ、どんどん大胆なご発言によって満場の心胆を寒からしめていただければ幸いです。じゃあ徳永先生、お願いいたします。

徳永：はい。先ほどですね、川口先生が自分は声楽家だから海外に行つて歌つても、そんなにあんまり援助にならない、自分が看護婦であつたら、なんか技術者だつたらっていうようなことをおっしゃったんですけども。私の体験から言いますと、私が一



番最初に、今でもそんなんですけども、アフリカの奥地に行った時にですね、一度もアジア人を見たことがなかったんです。それで、アフリカの人たち

というのは、長年の植民地政策の中で白人っていうのはみんな見ているんです。津々浦々に植民地時代には白人がおりましたから。でもアジア人を見たことなかったんですね。そしたら、私がそこに初めてのアジア人として行くことになった。そしたら、アジア人っていうのは黄色人種っていうから、村の人たちがみんなバナナみたいに真っ黄色な人がこれから村に来ると思ったんですね。

私に着く日、村の人たちがみんな出迎えたんですよ。そして、それで私を見てみんなが言ったことは、「そんなに黄色くないじゃないか」と言われたんです。それで子どもたちは、私が診療とかやりますと、もうこういう平べったい顔っていうのは見たことがないものですから、ひきつっちゃうんですよ。こわがっちゃって。白人は見てても、白人のこう魔女みたいなおばさんたちを見てるわけですよ。子どもたちがひきつっちゃうわけですよ。私がはして食べたりするんですよ。今でもうちのボーイさんは、私は海ののりをとつても好きなんですよ。そうすると黒いペーパー、ブラックペーパーをうちのマダムは、日本人は黒い紙、カーボン紙みたいのを食べ

るって、こう言うんですね。だからやっぱり私たちは存在するだけでなんにもしなくても、その異文化の中に私たちが存在するだけで、もうすでに国際交流っていいですか、国際協力っていうのは私はできてんじゃないかと思うんです。だからいつも私がこういうことやっておられますと、皆さんがあなたは技術があるからっていうことをおっしゃってるんですけども、日本だったら中学レベルの教育を受けていたら、もうすでにアルファベットを教えることもできますよね。私は今、エイズの患者さんたちに洋裁の指導をしているんです。

皆さんたちが余暇を過ごすために、洋裁を教えるんですね。そうすると、一度も針を通したことがない人、それを針っていうのは目がいいから、アフリカの人たちは視力が4ぐらいありますけれども、目がいいから針が通るっていうんじゃないんですね。やっぱり固定して、その力かげんとかそういうのがあって、だから針を通すことから教えずにちゃいけないんです。だから、そういう意味では、本当に気持ちさえあればアフリカと言わず第三世界にお行きになれば何でも皆さん即役立つ。先言いましたように、自分が存在するだけで、日本人っていうものを見るだけで、世の中に日本の車ばかり、私が最初にアフリカに行きました時にですね、ここはホンダの町なんですけれども、私の名前はミズコって言うんですけども、ミズコって覚えづらいって言うんですね。そしたらね「マドモアゼル・トヨタ」って呼ばれた時期があったんですよ。日本人は見たことないけれども、トヨタの車だったら知っている。だから「マドモアゼル・トヨタ・トヨタ」って言われて、私はそうじゃないって言ったことがあるんですけども。だからやっぱり日本は、これだけの経済力を持っておられますけれども、やっぱり世界に出ていっている人が少ないんですね。だから私は、是非何も技術がなくても日本ほど教育がいき届いたら 即何でも役に立ちますし、行きたい人はじゃんじゃん行ってほしいなと思うんですよ。以上です。(拍手)



渡辺：はい、重田先生どうぞ。

重田：徳永先生にちょっとお聞きしたいんですけども。

徳永：はい。

重田：私がアフリカへ初めて行った時は1976年で、そのころはまだエイズのエの字も聞こえなかったんですね。ですからまだエイズの歴史っていうのは、たかだか20年弱でしょ。

徳永：いや、20年もないですね。

重田：20年ないでしょ。

徳永：アメリカの雑誌に載ったのが1981年の6月です。それからあるお医者さんが若い人にカリニエ肺炎があるということで医学の雑誌にお載せになったら、いろんなところで、あっ、うちにもあった、ここにもあったって。その方たちの共通点を探っていたらホモセクシャルの方だったということでゲイの病気として発表されたのがエイズの始まりですよ。

重田：エイズが、アフリカでのエイズが、そのアフリカとの人口形態をね、著しく変えつつあるっていうことをちょっと先生からおうかがいたいんですけども。ちょっとご説明いただきたいんですが。

徳永：はい。私がおります中央アフリカ共和国、私は首都のバンギーというところにおりますが、そこで私が1月と7月に半年ごとに妊婦検診でのHIVの感染率をずっと調べてるんです。ここ3年間は14%、15%っていうことで一応停滞はしてるんですけども。それ以上の増加はなくて、停滞状況にありま

す。皆さんご存知のルワンダっていう国は公式的にHIVの感染率は30%で発表しておりますから、それで私たちは今、エイズの患者さんたちのケアをやっておりますけれども、とにかくお亡くなりになるのは皆さん若い方たち20代、30代で、要するに子作りをしている方たち、子どもを生んでいる方たちが常時亡くなっていったるわけですよ。今までは子どもが栄養失調で死んでた。でもおかあさんが元気だから、まだ子どもが生めたわけですよ。

でも、今は生む人が亡くなっていったるんですね。アフリカのことを、人口のことをやってらっしゃる方に言わせると、このままエイズの薬が見つからなかったら、2002年ぐらいからアフリカの人口曲線はずっと停滞ぎみとなって、それから下降現象になるってということなんです。

渡辺：へえ、そうですか。

川口：よろしいですか。

渡辺：どうぞ。

川口：そうしますとね、最初に渡辺先生から提案のあった人口爆発というのは何か…

渡辺：そうですね。

川口：テーマがちょっと違うような気がしますね。

渡辺：そういう悲劇的なかたちでね、人口問題が解決されるというのは、これは残念なことですね。

重田：でも今、徳永先生がおっしゃったのはアフリカのことであって、人口爆発は中国でもしかり、インド大陸でもしかり、それ以外の開発途上国でしかりですよ。

渡辺：特に中国がたいへんです。なんか先生にうけたまわったのは、2002年にはもう…

徳永：停滞

渡辺：アフリカの

徳永：増加傾向が

渡辺：人口が横這いになる。

徳永：増加がストップしちゃって、暫く何年かがずっと停滞してって、そしてそれから下降に移るって…

渡辺：あと5年でしょ。

徳永：はい。

渡辺：へえー、深刻ですね。

徳永：エイズは、ルワンダとか地震が起きたとか、そういうことですごく大きなニュースになりますけれども、このエイズの問題っていうのは、いわゆる「音のない戦争」って言われてまして、じっとしている、静かに。それは戦争以上の人たちの命を奪っているわけなんですよ。だから日本は幸いとしてエイズの方たち、HIV感染者っていうのは非常に少ないようですけども、アメリカはもうすでに25万人の患者がおりますから、薬が発見されない限りその方たちはもう亡くなっていくわけですよ。だから30代、40代の方たちの死亡率の一番は、アメリカもエイズが一番になっております。

渡辺：ちょっと問題からそれるかもわかりませんが、せっかくアフリカの問題が中心になりましたので、川口先生におうかがいしたいんですが、川口先生は芸術家でいらっしゃる、非常にアフリカに魅力を感じていらっしゃる。私はアフリカの芸術っていうのは、20世紀の芸術の革命をおこした一番の原動力じゃないかと思っております。ピカソの絵なんかも、あきらかに私はアフリカから来たと思うんですが、その魅力についてちょっと語っていただけませんか。

川口：出番を作っていただきまして、ありがとうございます。私がドイツで勉強させていただいたという洋楽、これある時期ヨーロッパのほんの弱小の民族音楽だったんですよ。それがキリスト教の発達とともに世界音楽のようなかたちでクラシックという大きなジャンルを作ってますけども、実はそのアフリカの音楽のすばらしさというのは、今現在私たちの身の回りにある音楽の中にもものすごい大きなエネルギーとなって浸透していると思います。これはたいへん大きな歴史的な問題なんですけども、アフリカの黒人が奴隷として中南米に移され、そしてそこで更にそこから更にアメリカ合衆国に移されていったというアフリカ黒人たちの悲惨な歴史。ただこういった人口の移動ということの中から、アフリ

リカ人の持っている血って云いますかね、このリズム感、なんかそんなのが世界に伝播していったと思います。そして一番の特徴は、アフリカの音楽っていうのは人から人へ口伝で伝えていくもの、文字のない文化、だから私、ものすごく今の現在のアフリカのこと心配なんです。それは今のような飢饉、飢餓とか、こういう人為的な問題でおこったことの中から、本来伝えていかなきゃいけない口伝の文化というのが伝承されなくなる。ここに断絶できるんじゃないかということがすごく心配です。だって、今のあんなに魅力のあるリズム感にとんだあの音楽の世界。まあアフリカの人たちがいたから、たとえばラテンアメリカのラテン音楽、タンゴがあり、サンバがあり、そしてそのあとにアメリカに来てジャズが生まれ、ビートルズが出ていって世界中にあのジャズの音楽のすばらしさ、あれは根底に黒人の持っているあのリズム感があるんですよ。そんなふうに音楽の世界を世界中に席卷してくれたアフリカのスピリッツというのが、今なんかすごく怖いなあと思います。そういう面でアフリカの文化の伝承っていうのが、今の現状の中でこれまでどおりにおこなわれていくものなんでしょうか。そのへんちょっと教えていただきたいですね。

徳永：やっぱり私は、その人口問題って若い人たちが本当にたくさんの方が子どもを残して20代、30代で亡くなっていかれるわけですよ。

今、そのユニセフはブラックアフリカに1500万人のエイズ孤児がいるって。だからそのエイズ孤児の問題っていうのは、ユニセフにとってすごく大きな問題。エイズ孤児っていうのは、その子どもはエイズじゃないんですよ。ご両親がエイズで亡くなってほうり出された人たちの問題なんですよ。だから本当に親が亡くなった時に、先生がおっしゃるように、そういう子どもたちが音楽なり、農業なり自分たちの習慣、風習なりをうまく伝えていけるかどうかっていう、そこらへんは非常に大きな問題だと思います。

川口：だって、自分たちが持つ文化がだんだん

消滅してくなって、ものすごく悲しいことだと思いますよね。

渡辺：彼らはどうなんですか。アフリカの現地人は自分たちの持つおる芸術、絵にしても音楽にしても、それだけ価値があるということは自覚してないわけですか。

徳永：いや、自覚はないと思います。やっぱりそういうふうに、その日の目を見るチャンスがないってことなんですよ。

渡辺：それとやっぱり私は教育の問題だろうと思うんですがね。だから識字率の問題に結びつくわけですが、なんとかまともな教育をね。あそこは、現地ではあれなんですよ、義務教育もないんですよ。

徳永：はい、義務教育はございません。

渡辺：これは悲劇ですよ。エイズの撲滅もさることながら、やっぱりまず義務教育制度を作るべきだと思いますね。

徳永：アフリカの人の中には、やっぱり植民地時代がよかったという意見が多分にあるんですよ。その時は教育も受けられたし、病院に行けば薬もあつたってことなんです。

独立してから35年、だんだんだんだん中央アフリカにしましても、ザイールにしましてもずっと後退してきて、今の現在があるわけなんですけれども、植民地から独立したとたんにお金を払わないと学校へ行かれなくなったんですよ。だからやっぱりお金のない人は学校に行けない。だから今私のおります国は識字率が女性は25%なんです。だから何をやるにもそこがネックになってくるんですよ。

男性はもう少し識字率が50%ぐらいありますけれども、わずか中学校に進む人たちが17%しかおりませんから。そこらへんが一番貧困の根源にあるっていうのは、やっぱりこれは無知だと思います。

渡辺：だんだん問題が深まってきたようですが、重田先生何か。

重田：はい。いわゆる先進国が開発途上国に対して、あるいは低開発国に対して、ある意味での罪悪を犯しているんじゃないかってことを一二私を実例で

ご説明する必要があると存じますので。たとえばですね、アメリカが、ドイツが巨額のお金を使ってですね、アフリカに高速道路を作る。作っても、そのあとのケアについての教育をしない。そのためにですね、まるでマンハッタンにあるようなりっぱな50階建てのビルができてですね、数ヶ月後にエアコンは壊れちゃう、エレベーターは動かなくなる。それを直そうとしない。サービスっていうのは、たいへんお金のかかることなんですよ。ですから商品売って儲ければそれで終わりだと、そういうことが非常に多いわけですよ。たとえば、日本の会社が一台数億円するような港の港湾設備、クレーンを注文を受けて作ってもですね、6ヶ月後になったらそれはバケモノのように建っていると、使えなくなっちゃってるということ。

それから、私の知ってるんではナイジェリアの件でしたけれども、日本のある会社が日本の米作を植えつけようじゃないかということで、広大な森林を開いてですね、田んぼを作った。5年ぐらいうりまして何とかお米が作れるようになったと。もういいだろうと思って日本の技術者が帰ってきたとたんに、全然また草場になってしまうということですよ。要するに、何か新しい、さっき教育っていうお話がありましたけれども、教育をしないで商品売りつけるだけで終わっているようなものが非常にたくさんあつたわけですよ。もっとひどいになりますと、汚職があります。私はブルキナワスト、昔はオートボルタという国でいろんな日本の商社員と話したんですけど、「今度日本のODAで3億円で井戸を掘る」と、「井戸を掘ってそれを提供することになりました」と。「それは、すばらしいですね」一緒にその商社員と酒を飲んで言ってるんですけど、だんだん本音が出てきて、「いや、この3億円を使ってもですね、1億円はなんと還元して日本の政治家のポケットに入っちゃうんだよ。あとの1億円っていうのは、現地の政府の首脳部のポケットに入っちゃうんだよ。結局3億円お金を使っても1億円しか井戸を掘るお金には使えないんですよ。」と。

そのような話が非常に多いわけですよ。私はそこには工業国家の儲け主義でね。その国の将来を考えない、そういうふうな姿を非常に見て私も一工業人として悲しく思ったと。そういうことが具体的にいくつか例をあげますとあつたわけですよ。話はちょっと飛ばしまして、私去年定年退職しまして、自分で仕事始めまして時間も出てきた。外国のCNNとかですね、やっとなケーブルテレビをいれましてCNNを見たり、BBCの放送を見たりしてますとですね、この数ヶ月だけでも、インドにモルダイブ、あるいはモルダイブっていうとても美しい真珠のような島があるわけですよ。それがですね、もう海の中へ沈もうとしてるってわけですよ。

天候の変化によって、エルニーニョ現象です。非常に美しい島だそうですね。私は行ったことないんですけども。それから、1ヶ月ぐらいい前のタイムズでは、今日本を含めて大洋が、海がですね、たいへんお魚の、無限のタンパク源の源だと思っているのだけれども、あと10年か20年、30年経ったらもう海は魚というタンパク源を人間に供給しなくなるんじゃないだろうかとというようなことも出てるわけですよ。かと思うと、たとえばイギリスの海油田だとか、今月だったかな、オマールの油田だとか、あるいはナイジェリア、私のいたナイジェリアを含めましてあと20年、ガソリンはなくなっちゃう。このような状態で21世紀に入る、何とかしないとイケないんじゃないかなと、そういうふうに私は思ってます、そのあとはまた次に話をしたいと思います。

渡辺：どうも悲感的な材料ばかり出てまいりますけれども。そこで21世紀のロータリーはいったいどうあるべきかっていうこと。そろそろそのテーマにかかりたいと思いますが、先生方、ひとつ忌憚のないご意見をうけたまわりたいと思うんですが。どうぞ、どういう順序で…。はい、どうぞ先生。

川口：はい、よろしくお願ひします。先ほどドイツに留学してたころの話をさせていただいたわけですけども、もう一つ、留学時代をたいへん素敵な経験をいたしました。ドイツに着いたとたん、夏でした

んで散歩に行きました。ある近くの森へ。そうしましたら、何と素敵な女性たちが上半身、太陽の白日のもとにさらして日光浴をしている。たいへんうらやましい。最初はびっくりしたんです。



重田：おっばい出してですか。

川口：ええ、もちろん。たとえばですね、ヨーロッパに3年ぐらい住みますと、日照不足っていうことを体で感じるようになります。

太陽にあたることによって体の中にできる、なんでしたっけ、ビタミンDですか、それが体の中で少なくなるんですね。そうすると、3年以上ヨーロッパで過ごした人はたいへんそうです。3年目から体調がおかしくなります。そうすると、知らないうちに日の下、カンカンと照っている日の下を歩くようになりますし、お日様が出ていれば全身をさらけ出したいと思う。そして、さらけ出している時に海岸なんかに行って、パンツはいてる分、そんだけでもお日様あたらないとなんか損するような気がするんですね。ついに私もドイツにある「ヌーディスト村」ってところへ行きました。実に3週間過ごしましたよ。や、うらやましいと。いや、でもね、そこのヌーディスト村での生活ってというのは決してそういう卑猥なものではないですね。たいへん崇高なものなんです。人間が生きてる姿を何も隠さず太陽の前に生きるためにさらけ出してる。ものすごく本当にじーんとくるほど美しい姿です。老若男女ですよ。みんなです。

美しい女の人も、何もつけずにバレーボールをしています。これは生命維持に必要なことなんです

ね。ところが最近ニュージーランドでもそうです。北欧諸国もそうですよね。外出する時にはお日様にあたらないようにしなさいという教育が行なわれている。お日様にあたったら、もうオゾン層が壊されるから、お日様にあたれば紫外線が直接体にあたるからお日様にあたらないような教育ってというのが今、両極の方の国々でおこなわれている、たいへん悲しいです。これ、もの本で読みましたけれども、オゾン層が現在地球をおおっている天体としての状況になるのになんと30億年の長い歳月がかかってやっと現在に状態にまでなったということを科学雑誌で読んだことがあります。それをなんですか、この地球上の人間は。わずか10年ですよ、このオゾンという物質を使うようになってね。その間に何て大きな地球への、天体として地球にね、汚点を傷つけようとしているかということをおもった時、ものすごく悲しくなります。もう二度とヨーロッパに行って、あの公園でおしげもなく体をさらして女性たちを見ることができないかと思うと悲しいなと思います。でもこれは、現代の私たちが大きな責任を負っていると思います。そこで今、渡辺先生が言われたようなロータリーに提言ってということで、私はロータリーの人だから考えていただけと思うんですけども、奉仕の理想ということは、今現在、ここにいる人たちがアフリカの人たちに奉仕をしましょうかというような問題で奉仕の理想ということになっていると思うんですけども、私たちはもっと将来の人、この地球というものに対して、なんかもっと奉仕をしなければいけないんじゃないかと、なんかそういう精神をここできちんと考えて、それは義務であり、責任であるということから、なんか考えてかなければいけないんじゃないかなと思います。それで、未来に対する奉仕というようなことで、ロータリーの皆さまに考えていただきたいというふうに思います。まあこれは一つの提言です。失礼しました。

(拍手)

渡辺：ありがとうございました。本当にいいことをうけたまわりました。そういう考え方は、やっぱり

ヨーロッパでもどこでも最近出つつあるようですね。若い世代のあいだに。つまり世代間公平。今の世代だけで地球上のいいものを全部消費しつくしていいのかな。もっと子孫に残すべきではないかという意見は、おっしゃるとおりだと思いますよね。重田先生、いかがですか。何かロータリーに対して。ロータリーはこういう点どう思うというようなひとつ…。

重田：やはり全体から話した方がいいと思いますけれども、私は埼玉県、生まれは東京なんですけども、埼玉県の荒川の先でお百姓として若い時を過ごしました。私が、そうだな17、18、高校生ぐらいだったでしょうか。ある日、荒川の水が真っ赤になったんです。

要するに、それは荒川の上流の化学会社が汚染物質を流したわけです。そのために荒川には当時たくさんのボラだとか、たくさんの魚がいたんですけど皆死んじゃったんです。

我々は、田舎のおっちゃんたちが、私はオヤジが外出していたもんですから代理になりまして、田舎のお百姓の皆さんと一緒にその化学会社に抗議に行ったことがあります。そしたら会社の代表の方が出てきて、「いや、自然には自浄作用がありまして、たまにはそういう失敗をしてもですね、自然ってものは自分で自分を直してくれる、そういう作用があるんだと。だから心配することはないですよ。いや、今回は申し訳なかったけど、どうぞ心配しないでください。」こう言われたんですね。

実はお百姓さんも喜んだと思うんです。「ああ、そういうもんかね」と。今回だいたいライラして抗議したけれども、「そうなんだ、自然が直してくれるんだ。自然がすべてを解決してくれるんだ」と言って帰ってきた。あとからわかったことですけども、本当にその数年か、7、8年後にですね、四日市の公害だとか、日本のあちこちで公害がおきて、いわゆる自然の自浄作用があるというのは間違いであったということがわかったわけです。それは、たとえば経済学でアダム・スミスの「神の手」だとか

ですね、あって、いや、絶対的なものが我々の社会っていうものを上手にバランスをとってきて、うまくいくもんだということもどうもウソであると。自然というものは非常に包容力があって、癒す力がある。ですから、すべてうまくやっつけていけるのである、心配することないのである。これもウソだと思います。ウソだと思います。

それからもう一つは、自然科学の発達があります。自然科学が発達して、いずれ天然、ソフトエナジーっていいですか、いろんなエネルギーをですね、作ってくれて、無害なエネルギーを作ってくれて、我々は20世紀後半と同じような快適な生活を続行できるのであれば、心配することねえんだと。私は技術者の一人として、これも実はたいへんな人間の傲慢であると、こう思ってます。やはり人間の生活を、人間のこれからの生活をコントロールできるのは神ではない、自然そのものでもない、人間の知恵だけじゃないかと、こう思うんです。今日は知事さんが公共事業体がやれることと公共事業体以外がやれることがしっかりあるんだよということ、ほくは実はまったくその通りだと思ったんですけども。

我々平凡な、あるいは善良な市民として税金を払ってくれば国が何かやってくれる、すべてやってくれる。国際機関ユニセフだとか、国連がやってくれるんだと、これも間違いだと思います。じゃあ誰が主体かという、やっぱり我々インディビジュアルの一人ひとりがこれからの21世紀を、いい21世紀を作っていくための主役であると、こう思うんです。こう思います。今、そういう観点からものを見ますと、ロータリークラブの皆さま、たいへんりっぱな仕事を展開しておられて、たいへん尊敬しております。たいへんなお金も使って、りっぱな人たちを世に出していらっしゃる。けれども、本当はロータリークラブ以外の人もですね、私を含めて、私もロータリークラブの人間じゃないんですけども、ロータリークラブ以外の人も実はそれなりに、さっき私が言った個人として社会に貢献するように

していかなくつてはいけないんじゃないか。要するに、豊かな人、あるいは経済的に余裕のある人だけの、いわゆる奉仕という言葉は解釈の問題ですけども、奉仕だとか、あるいは社会貢献という言葉はもうすでに終わっちゃってますね、我々自身が新しい社会に参加していかなくちゃいけないという時代が、実は21世紀の前半50年までにやないと、もう21世紀の後半はないんじゃないかという多分に私は悲観的に考えているわけです。そういう意味で、私がロータリークラブの皆さまに期待したいことは、お願いしたいなと思いますことは、ロータリークラブ以外の人たちもですね、これから社会づくりに参加していくんだということを非常に、ロータリークラブの皆さまってというのは、いわゆる広いビジョンを持っていらっしゃる、パースペクティブを持っている方で、そういう意味での普及活動にご専念していただければなあというのが私の考えでございます。



渡辺：ありがとうございます。(拍手) ロータリークラブは奉仕活動するのは結構だけれど、自分たちだけじゃなくて一般の市民も巻き込んでやたらどうだというご提言でございました。ありがとうございます。最後に徳永先生、お願いいたします。徳永：はい。私はロータリーへの希望、私たち民間団体からの希望ということでお願いしたいんです。国際協力っていうのは、日本の場合はまだ国がやってるんですね。海外青年協力隊っていうのは、日本の国が派遣してる。ODAも国がやってるんです。でも、もう世界の先進国っていうのは、国際協力

ていうのは、国レベルではやってないんですよ。地方自治体とか、市町村のレベルまで落とした段階で、もう国際協力っていうのはやってるんです。日本の場合は国際協力、たとえば海外青年協力隊。看護婦の例をとりますと、40倍の競争率があるんですよ。40倍で通らないですよ。そして、たくさんの方たちが海外とかに行きたいと思ってらっしゃる。でも国でやっておりますから、年に2回の募集があるんですけれども、だいたい協力隊っていうのは500人、500人ぐらいで年間1000人ぐらいの方たちを出していると思うんです。でも、もう国はあっぶあっぶ言っていて、その方たちの対応ができないんですよね。だから私は、やっぱりそういうのをもっと地方自治にゆだねるか、むしろ私たち民間団体の方にゆだねてほしいなって思ってるんです。10月6日っていうのは皆さんご存じのように、国際協力の日だったんです。東京の日比谷公園で国際フェスティバルっていうことで、私たち海外でやってる民間団体の方たちがみんなお店を出しまして、300ぐらいの民間団体があるんですね。その人たちが全国からおいでになって、いろんなフェスティバルをやったんですよ。

その時に就職ガイダンスっていうのがありまして、だから関西からも大学生が就職ガイダンスにみえるわけです。「ほくもこれから先は、民間団体に働きたいです」って、私たちのところにもおみえになるんですね。でもですね、私たち民間団体っていうのは本当に貧乏なんです。ものすごく貧乏なんです。だから人を派遣するのに、派遣した人たちの給料10万円っていう、今の世の中に10万円で生活していけないですよ。でも民間団体の人たちは、10万円の給料すらもらえないで我々はやってるわけなんです。もちろん好きなことをやっておりますから、人のお金で好きなことやらせていただけてるんですけれども。だから日本人は、何かどこかに援助するとなると、どうしてもユニセフだとか大きなところに援助していかれる。どうしても我々、民間団体っていうのは信用ないんですね。この間もなんか大き

く新聞に、民間団体が不正をやったという、アフリカ教育基金が不正をやったということを新聞に書かれます。ああいうことを書かれちゃうと、もう民間団体は全部また信用がなくなってくるわけなんですけれども。とにかく私はロータリーの方たちにお願ひしたいのは、本当に民間団体を少し援助してほしい。そして、民間団体を育ててほしい。欧米諸国のようですね、欧米諸国っていうのは、非常に国レベルじゃなくって一般のレベルで直接海外援助をやっておりますから、そういうところにロータリーが私たちに助けていただけたら、本当に今若い人たちが、たくさんの方たちが第三世界に行って働きたいと思ってらっしゃるんです。私はやっぱり唯一日本が変わるっていうのは、若い人たちがやはりアフリカなり、アジアなりの貧しい国を見て、やっぱりその体験によって自分の生活を見直す。自分たちがどういうことを、どういう生活をやってるのかということを見直すと思うんですね。だから行きたいっていう人は、私は行ってほしい。経済的にもいろんな民間団体がありますけれども、民間団体はやっぱりあまりにも貧しくて、そういうことを実現させてあげられない。若い、私は今の若い人たちは、何か茶髪にしたりとか、いろんなことで社会の批判を、軽いついて言っていて批判をあげたりしておりますけれども、私そういうことはないと思います。

そういう、国際フェスティバルの時に地方から高い交通費を払って自分の就職ガイダンス、「私はアフリカでやりたい」「私はアジアでやりたい」って言って来る人たちがいるっていうことは、これは私は日本の将来っていうのは、すごく希望があると思ってるんです。だからそういうところにロータリーの方が、お助けいただけたらよろしいと思います。是非よろしくお願ひいたします。(拍手)

渡辺：ありがとうございます。きわめて短時間に、非常に充実した内容のシンポジウムでございましたけれども、そろそろ与えられた時間が少なくなってまいりましたので、まともに入りたいと思います。いろんなご意見が出まして、特にアフリカ中心にな

りましたけれども、いわばアフリカが21世紀の問題の象徴的存在になりつつあるような、そういう印象を受けました。南北問題、それから自然破壊の問題、人口問題、エイズの問題、ほとんどがどうもアフリカに集中したような感じでございます。

重田先生が先ほどおっしゃったお言葉の中に、人間の傲慢、これを痛烈に批判なさいましたが、私もまったく同感でございます。人間は、今までの人間は自然界を征服するんだとか、自然界を改造するんだとかっていう大それた言葉を使って随分自然を破壊してきたわけですが、これにはやっぱりちゃんと報いがくるだろうと思います。そういう問題につきまして、私最近痛感しておりますのが宮沢賢治。ご案内の詩人ですが、彼は去年が生誕100周年でした。この宮沢賢治っていう人は非常に子どもたちにも愛読されており、我々も若いころから読んできたわけですが、あれだけ広く愛読されながらなんか最後にわからないものが残る。そして随分矛盾した趣味を持ってますよね。彼の作品に登場する、たとえばゴーシュとかですね、イーハトーブとか、いろんなハイカラなカタカナの言葉ばかりの名前が多いわけで。ああいうハイカラ趣味が一方にありながら、熱烈な大乘仏教の信者だったそうですね。だから彼の思想は、結局その大乘仏教を本当に理解しないことにはわからない。彼の思想は自然界というものは、生きとし生きるものはすべて平等であって、人間だけが偉いではないという信念で貫かれている。人間だけが偉いと思うのは、傲慢である。人間には、他の動物の肉を食べる権利はないんだと。そういう考え方からついに彼は肉食主義に走るわけです。そして事実それを実行するのです。彼は肺結核ですから、そんなことやったらもう自殺するようなもんですけれども、それを実行しまして、結局37歳で亡くなってしまふ。おそらくもっと栄養をとれば、もっと長生きしたんだろうと思いますけれども、それは彼の本意ではなかったかもしれません。「山川草木、悉背成仏」という言葉があります。山も川も木も草も、すべて仏様を内蔵しているの

あつて、すべて仏様の現われである。人間だけが偉いんでないという、そういう思想です。

今から六十年以上も前に、そういう思想をうち出した作品をどんどん書いたというのは、これはやっぱりたいしたもんだとおもいますね。「よだかの星」なんていう童話があります。「よだか」というのは、あれは鷹ではないんだそうで、本当はカワセミの一種らしいのですが、そのよだかが本当の鷹におどされます。「おまえ、その鷹なんていう名前は、明日からやめろ。そうしないと食ってしまうぞ」と鷹はいうのです。



夜鷹は、これは神様からいただいた名前だからやめるわけにはいかないと考えて、もう死を覚悟します。死を覚悟しますと、今まで自分が食べてきたいろんな

虫たちがどんな気持ちで自分に食われたか、それがわかるんですね。自分は、それじゃあ死ぬことに決めて、一切そういうものを食べないぞと決心する。そしてよだかはどんどんどん空高く昇って行って、とうとう星になってしまったという、お伽話ですけれども、これなんかもやっぱり菜食主義を表現したのでしょうか。そういう思想の持ち主の作品がアメリカ、ヨーロッパで訳されて非常に大きな反響をまきおこしているんだそうですが、それだけやっぱり時代を先取りしていたんだらうと思うのでございます。今日はたいへん先生方から貴重なご意見をちょうだいしまして、会場の皆さまもさぞかしご勉強になったと思います。三先生に対しまして、もういっぺん拍手をちょうだいいたしたいと。ありがとうございました。(拍手)

